

ロータリー月例報告書 vol.8

留学先：レッジョエミリア音楽院（イタリア）

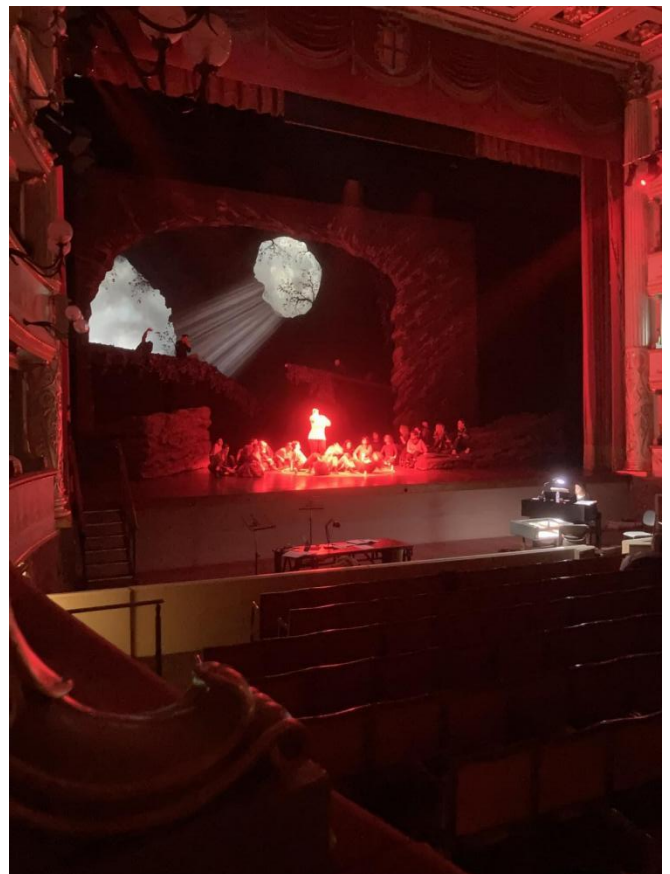
二月を迎え、レッジョエミリアでは今年は降雪もなく、比較的暖かな時期を過ごしていました。私が育った岩見沢では積雪量が非常に多い時期となり、毎年除雪に追われる期間というイメージがあるため、こうして雪のない地域で毎日自転車を利用して生活ができることに便利さを感じつつも、少し寂しさを覚えています。

さて、今月はモデナの歌劇場にて、ヴェルディのオペラ「仮面舞踏会」に合唱で参加するという非常に貴重な経験をさせていただく機会に恵まれました。経緯としては、歌劇場の事務局の方から本当に突然電話があり、合唱に参加しないかとお誘いをいただくというものでした。予てから歌劇場での仕事に参加したいと言っていた私にこの誘いを断る選択肢はなく、二つ返事でお受けしました。

他に参加していた方から内部事情を聞くと、複数の歌劇場を掛け持ちで働いている方が大半で、またピアチェンツァで行われている「イル・トロヴァトーレ」と全く同じ日程でのスケジュールであり、また他国へ出張でオペラの公演に行く計画もあるということで、人手不足のところにとままたま学生に白羽の矢が当たったということだったようです。他に参加していた学生は同校の男女四名でしたが、他の参加していない学生に確認をしたところほとんどの学生にはそもそもその電話やお知らせはなく、またモデナ自体や近くにパルマの大きな音楽院もあるにも関わらず、今回レッジョエミリアに住む我々にこのように声がかげられたことは、本当に幸運だったように感じています。

今回こうしてイタリアの歌劇場の一つで働く経験をしてみて、思ったことが沢山あります。例えばスケジュールについてですが、電話を受けて二週間後には練習が毎日入り、とはいうもののしかし三回の合唱合わせ、二回の舞台練習、三回のオーケストラ入りのほぼ通して全体練習（合計で一週間と二日）を経てすぐに公開リハーサル、そして本番といった強行スケジュールでした（そもそもこの作品を歌ったことがある前提のため、合唱の歌唱パートは合唱合わせ時点でほぼ暗記）。もちろん参加したことがない舞台という場合もあると思いますが、その場合はすぐに譜読みをして暗譜するバイタリティが必要ですし、また何か普通の仕事、例えば飲食店で働いているとすると、相当融通が効く環境でない仕事を受けること自体も難しいのではと思いました。

音楽的な面では、まず今回は参加比率に合わせバリトンでなくバスパートに参加しました。皆さん本当に重低音がよく鳴る本当にいい声で、合唱指揮者の意図に合わせてすぐに対応をする（例えば声に息を多く混ぜて歌う、囁くようにと言われて柔らかいのに子音がとても前に出て聞こえる）様子から学ぶことは非常に多かったです。母国語としてイタリア語を話す彼らから見て聞いて学び、また真似をするこういった



リハーサルにて古い師ウルリカの登場シーン
オーケストラピットにピアノを置いて進行します



他の学生・卒業生と。右の子のようなウィッグ、
その上にハットを被りました

経験は、ソロの勉強では触れる機会が少ない得難い経験であるように感じていました。

そして、今回も何より一番強く感じていたのは言葉の壁です。リハーサルが始まってしまえば大まかにどんな指摘を受けているかはわかりますが、音楽的なことからそれ以外のことまで様々に冗談を飛ばしあったり、スケジュールや細かい予定などについても都度変更があるため、参加者それぞれの情報を聞いて噛み砕いて共有したりと、コミュニケーションで難しさを感じる事が非常に多かったです。そして、他に参加していた学生たちはイタリア語に長けた子たちであり、中にはまた次の仕事の誘いをもたらすと話している子もいました。こういったチャンスを物にして次に繋がられる人が、プロの世界で活躍していける人たちなんだろうと身に染みて感じました。

またこうした沢山の思いを抱えながら参加していましたが、その中で感動したことの一つは、一番間近でプロの方達が歌っている姿を見ることができたことです。またそのプロたちの普段の様子やそれぞれの人となりを見られ、その歌声について裏方で働かされている方達の批評も聞くことができ、本当に面白く新鮮な気持ちで過ごす毎日でした。

現在三月上旬に行われたモデナでの三度の公演を終え、さらに三月中旬にはレッジョエミアにて同団体による仮面舞踏会の公演が二回行われます。また公演日の午前中には学校にて演奏会がある日もあり、久しぶりに人前でソロで歌う予定を持ちました。四月五月も今のところ毎月それぞれ歌う予定があり、立て続けのスケジュールとはなるものの、こうして忙しくも学びの多い日々を過ごせることを心から喜ばしく感じています。

続いて、今月はドン・ジョヴァンニの公演がレッジョエミアで行われ、敬愛するジャコモ・プレスティア先生が歌われていたので聞きに行きました。最近舞台演出の授業の中で様々な役柄に取り組む機会が多いですが、例えば魔笛のパパゲーノや愛の妙薬のドゥルカマラ、ドン・ジョヴァンニであればレポレッコなどといった少しコミカルなキャラクター、演出についてとても興味深く見ています。自身が取り組むとなるとこういった役柄に当たる可能性があると思うことと、シリアスなキャラクターや演技も奥深いですが人を笑わせたり自然と楽しく魅せる演技や歌い方こそ難しく、それができるようになりたいと感じるためです。実際今回観劇した際にも、ドン・ジョヴァンニに振り回されて可哀想だけれどすぐ調子に乗るお調子者なレポレッコ、という印象の彼の歌や動きが聴衆の笑いを誘う場面が沢山ありました。自分がその役柄に取り組むことを想定すると、歌唱技術は前提として、舞台上において現地人以上に巧みに言葉を扱う必要性、見てわかりやすい演技など、練度を上げていかなくてはならないことが多いように感じます。こうした観劇を通して、見て学べることも沢山吸収し続けたいです。

改めまして今年度も大変お世話になり、ありがとうございました。次年度も変わらぬ指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしく願いいたします。



仮面舞踏会のカーテンコール。左右後方に合唱隊がいます
大橋は上手側（舞台向かって右側）後方に配置



観劇したドン・ジョヴァンニのカーテンコール